

昨年未久々に帰省し、子どもたちとお墓参りをした。平成最後の、という言葉が飛び交う中、私も「今回のお墓参りが平成最後なのかな」と思いながら花を買い、陽子ちゃん（仮名）のお墓にも数年ぶりに足を向けた。

陽子ちゃんはいつも笑顔で、おしゃべりが大好きで、おさががよく似合うかわいい女の子だった。放課後には縄跳びや、草花でままごことをして一緒に遊ぶ仲だった。

そんな陽子ちゃんが体調を崩したのは小学6年の夏だった。登校してすぐにおなかの痛みと階段に座りこみ、病院へ行つてそのまま入院した。白血病だった。それから何回かお見舞いに行き、病室で一緒に折り紙をした記憶がある。その時も陽子ちゃんは笑っていて、私は亡くなるとは全く頭になかった。

陽子ちゃんが亡くなった知らせを聞いたのは、中学1年の夏休みに入るころだった。6年の時の担任の先生や同級生とお葬式に行くと、陽子ちゃんの真新しい中学校の制服がかけられてあった。先生は、私たちに最後に陽子ちゃんのお見舞いに行った時のことを話してくれた。ずっと寝ていた体を起こし、おなかに水が溜まっても、「死にたくない、死にたくない」と布団をたたいて泣いていたこ

## 陽子ちゃんのお墓参り

となど。そして先生が泣きじゃくりながら「精一杯生きてください。」と私たちに言ってくれた言葉は、今でも忘れられない。

久々に陽子ちゃんのお墓参りにいくと、いつもの通り新しくきれいな花が供えられていた。墓石に刻まれた「享年十三才」という文字が胸に突き刺さる。私の子どもも、陽子ちゃんが亡くなった年に近い年齢になつてきた。自分の子どもを天国に見送るということは、それから先の成長や、子どもの歩む人生も見守れないということだ。ご家族の悲しみは計り知れない。

私は毎日、仕事・子育て・家事など時間に追われ、つい子どものできていないことに目を向けてしまいが、今回お墓参りに行き、日常で感じていた重苦しかった気持ちが軽く、穏やかになった。そうだ、この子たちは生きていく。そして私のそばで毎日笑っている。百点満点ではないか。この子たちが幸せな人生を歩めるように、私もずっと笑顔でいよう。これはきっと陽子ちゃんが、命あることがどれだけ幸せなのかということを私に教えてくれたんだろうな、そう思えた墓参りであった。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569